

膏董集

卷之三

1545
3



骨董集上編後帙二卷目錄

下之卷本

- 毬杖一
- 粥木粥杖祝木ちいたけ棒四
- ひくろの名義ひくろの假名六
- 雛社雛合八
- 古書どもにんそく雛遊くまぐ十
- ひのふ衣十三
- 室町家の比れ雛圖十五
- 三月三日乃雛遊十七
- 土雛圖二十
- 後の雛二十三
- ぬりく付礪毒二
- 源氏物語の雛遊九
- 古製雛圖十三
- 唐土鏝人十八
- 雛使圖二十一
- 姫瓜雛二十四
- 羽子板三
- ね乳母日傘と云詠五
- 雛遊の始七
- ひのふれ調度十一
- 又十四
- 伊勢小米雛十六
- 雛繪櫃十九
- 雛椀折敷圖二十一
- ひのふ草二十五

骨董上編 下前首之三

下之卷末

- 勸進比丘尼繪解一
- 人形圖并考三
- 於国哥舞妓古圖考五
- 酸醬を吹たす七
- 比比丘女九
- 目あしどら軒のまぐめ十二
- 宿世焼十四
- 輪鼓十七
- 海老上臍十九
- わかぐ豆腐田樂豆腐上物二十
- 板風呂湯錢風呂屋二十三
- 端午茅卷馬二
- 後妻打古圖考四
- 小兒を愛とふバアとのみ八
- 編笠古圖十
- 見世棚十五
- 子日れ雛遊贖物の比比奈十八
- 腰鼓兄弟二十
- かくれあそび十一
- 目比十三
- 虫のたこ繪十六
- 端午頭巾袈裟ハ
- 糸縷とのくまぐがう六
- 菅蒲曹再考二十二
- 提燈再考二十四

事物紀原 卷三 宋朝會要を引く云「毬杖非古蓋唐世尚之以資

玩樂」也。唐の時盛ん。聖武天皇の御時ハ唐の玄宗の時ハ

のこれハ打毬のたよりあり。和漢同時とりよべ。○唐の僖宗殊よこを

好めり。僖宗帝ハ。御國の貞觀仁和の比ハあされ。○遼ハこれを善擊者

あり。遼史 十卷百五十五臣傳下「耶律塔不也。以善擊鞫。幸

於上。凡馳騁鞫不離杖」と云えたり。淵鑑類函 卷三百一 巧藝部八ハ

打毬の古事あり。詩篇歌をのま。戒たれど。そのさけり。づらり。これハ

ら心舉ぐ。○こゝ打毬より變り別れて。毬杖と稱。一種の玩具。ある。○ハ

ゆづれの此より詳あらざ。其まじ。○ハ宇都保物語 小つえたり。中比の物ハ

ええ。源平盛衰記 十卷二云「法師の首を造。毬打の玉を打。如く杖を以て

ゆら打。ら打蹴。たり踏。た。様。小。あり。太。嬰。兒。共。態。と。此。玉。あり。物。を。同。ハ

是ハ當時。世。ハ。聞。え。給。ふ。太。政。入。道。の。首。也。と。答。平家物語 卷一 文覺上人

悪岐國一流。これハ。後鳥羽院を毬打の冠者。と。中。と。の。あり

乃。こ。こ。と。の。所。ハ。此。君。の。ま。り。に。毬。打。の。玉。を。の。せ。を。給。ふ。文。覺。の。ま。り。小。の。口

ハ。け。の。ま。り。と。の。義經記 卷一 牛若まが。の。ま。り。の。段。ハ。云。あ。と。ら。り。づ。ら。り

ら。の。の。玉。の。ま。り。の。ま。り。を。と。と。出。木。の。え。づ。に。け。ひ。と。を。と。と。け。り。が。び

と。名。付。一。ツ。と。清。盛。が。び。と。を。け。ら。れ。け。る。云。袖中抄 親顯昭撰 十之卷

この條。ハ。十。節。録。黃。帝。云。取。蚩。尤。頭。之。取。眼。射。之。

云。毬杖。是。也。云。以。彼。例。漢。土。年。始。用。件。事。國。中。無。凶

事。仍。日。本。國。學。其。例。年。始。打。毬。杖。云。日本歲時記 下之卷

徒然草 下之卷 四十四段 「さざらやうへ。正月小打。ち。ま。ら。や。を。ま。云。院。と。り

神泉苑。出。て。燒。あ。る。あり。云。擧。學。往。來。印。作。改。年。初。月。擧。宴。

毬打。云。袖中抄の作者顯照ハ。後鳥羽院の所時の人。當時

宇都保物語

祭使巻よ云「騎射」

そとと後りどもこまうこまうと

すひあそぶのあそびかやある

玉をど後りどもあそぶか

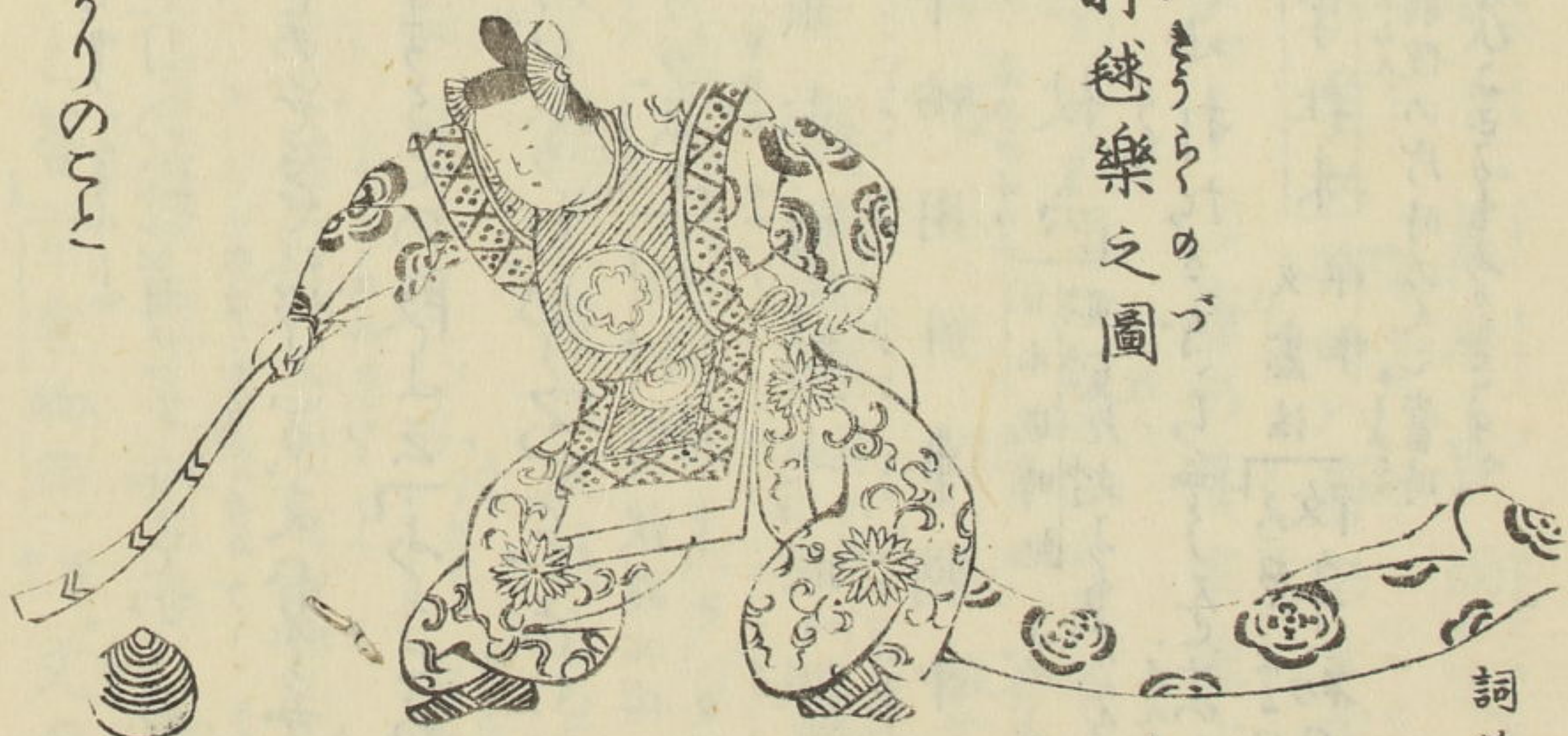
ついであそびと後りどもまう杖を

りしてつをびてうちめらていまひ

のそまに今の木よまう杖まう懐よ

作るあまうれと○按どまうこれ四月まうりのこ

打毬樂之圖



詞花堂模藏

以外に衆人
二人おそろ
装束して
なすり合
これと畧

よとまうまうりの亭うてのり

らと今人ども打毬樂のまう

らん一のそまうまうまも

玩具の毬杖のりてくべん

まうれば玩具の毬杖ハ打毬

遊まうりしよあのらで打毬樂の

玉を打をまうびたうり起まうあべ

そのまう毬杖の玉といひ玉打もりひあらん打毬ハ鞠うて玉の形

めらされいあり近古の毬杖の玉もまうた玉の形寛文六年の訓蒙書

載る書中に物ををんと考ありひべり〇のうへハ騎射の後まあうど打毬

樂を奏しりるや保氏物語螢の巻よ五月五日の節會よ騎射競馬を

かゝるたれて後ハ打毬樂落躰まうの象樂のりてとええたる花鳥餘情



ぶらぐの各ハ古き書よいまもごんあからむ。近き昔造ヲ始たる物あるべし。毬杖と
 同物と云ふいひがごとく。元来別物。本草啓蒙 卷廿一「碌碡ハ田器あり。秋凡の
 如く六稜あり。兩頭ノ索ありて。土上をひいて地面を平よする具あり。三才
 畜會 授時通考 等ノ畜を裁と。本邦正月兒戲のぶらぐハこの形ノ象る
 あり醒 云。今此説よりて按よ。正月男兒小ぶらぐをりてあそぶ。六年始ノ農
 業のしむびとを。農事をとむる意あるべし。古画をみる小ぶらぐノ紐をつけて
 地上をひく体をかやく画けり。是田畑の地面を平小するのまねびあらん。明王圻が三
 才畜會を考る。碌碡ハ長さ三尺むろと大小等くらと。或ハ木或ハ石をりてけく。玉
 畜力を用て田疇の土を打。水陸通して用之とあれバ。馬把のぶら牛馬の尻小けりて
 ぶらぶら物あるべし。○ぶらぐの制作を考る。兩脇につけたる戸車の如きりのいん
 地をひく料の車とてのしあるべし。あるを後ノ毬杖とあらひ。その車とてり放ちる

骨董上編 下之前五

投る玉と。ぶらぐの紐を持つてり放ちる。推のりりり。玉を打とれり。もろり。
 毬杖とある。物のやうにあり。放たよわらむ。明曆治の比の古畜を見て推
 當小さあり。前よとる。今ハ年始の祝のちり物よするの。何の所用も
 あきりのとれ。左よ出と畜をりて考へ母りべし。

○羽子板 三

正月女児のりてのそが羽子板の始詳あらむ。按るよ 下学集 羽子板 正月
 かくのぶらぐあぶらをつけり。前よとる。下学集ハ文安元年の春。羽子板の
 今文化十年より。あぶらと三百七十年むろと前よとる。物と。その前ハ比のあり。放
 つらむ。 盛唐鈔 卷六 爆竹の條。羽子板と云名のを裁たり。前よとる。世説問答
 天文十三 上の巻よ「向て云をあらけり。のこぎのこいひてつたけ。のりある
 る。や答られんをあらけり。蚊よられぬ。あひひあり。秋のくどぬ。蜻
 蛉と。小虫出きり。蚊をとり。物と。のこぎのこいひ。本蓮子あぶらとんがら
 けらり。と。のをほけたり。それを板とつ。のこぎのこいひ。時とんがら。の

中よりあり。さそ蚊をかきれーめんたぬよ。さそ蚊のこととほききゆるあり。林逸節用

集 明応 羽子板 胡鬼板 子 日次紀事 延宝四 正月の條よ云

羽兒 擊毬 杖 玩 弓 矢 女子 動羽子 木 板 弄 絲 毬 云々 又

十二月市中の賣物をあらうりる如く毬及毬杖 部里 羽 古義

板」とわれは胡鬼板小作りの借字よく。羽子木板の上畧吹羽子のことを胡鬼の

子といふも板の方よりれたる名吹ともおもわれど。下学集 羽子の古書は羽子板

胡鬼板とわれは後の日次紀事を證として決ぐ。あや古書をたけぬべし。

○さそ 私可多咄 万治二年印本 田舎人京のりして。さそ持あふ勢をうて。羽子板を

のらるといひ。笑話を戒たり。これによく。古制の羽子板の勢よ似たらん。今の勢よ

まづへん形よのらんとおもひ。三春羽子板といふをうんふ。いづれも勢よ似たるべ

其古制のあらうりあるをたれをゆにせ。高をさるべし。

○此數山日光よその外諸別の高山よおもむ。木の子をつむ。又らだのこいも。玩具の羽子よ形

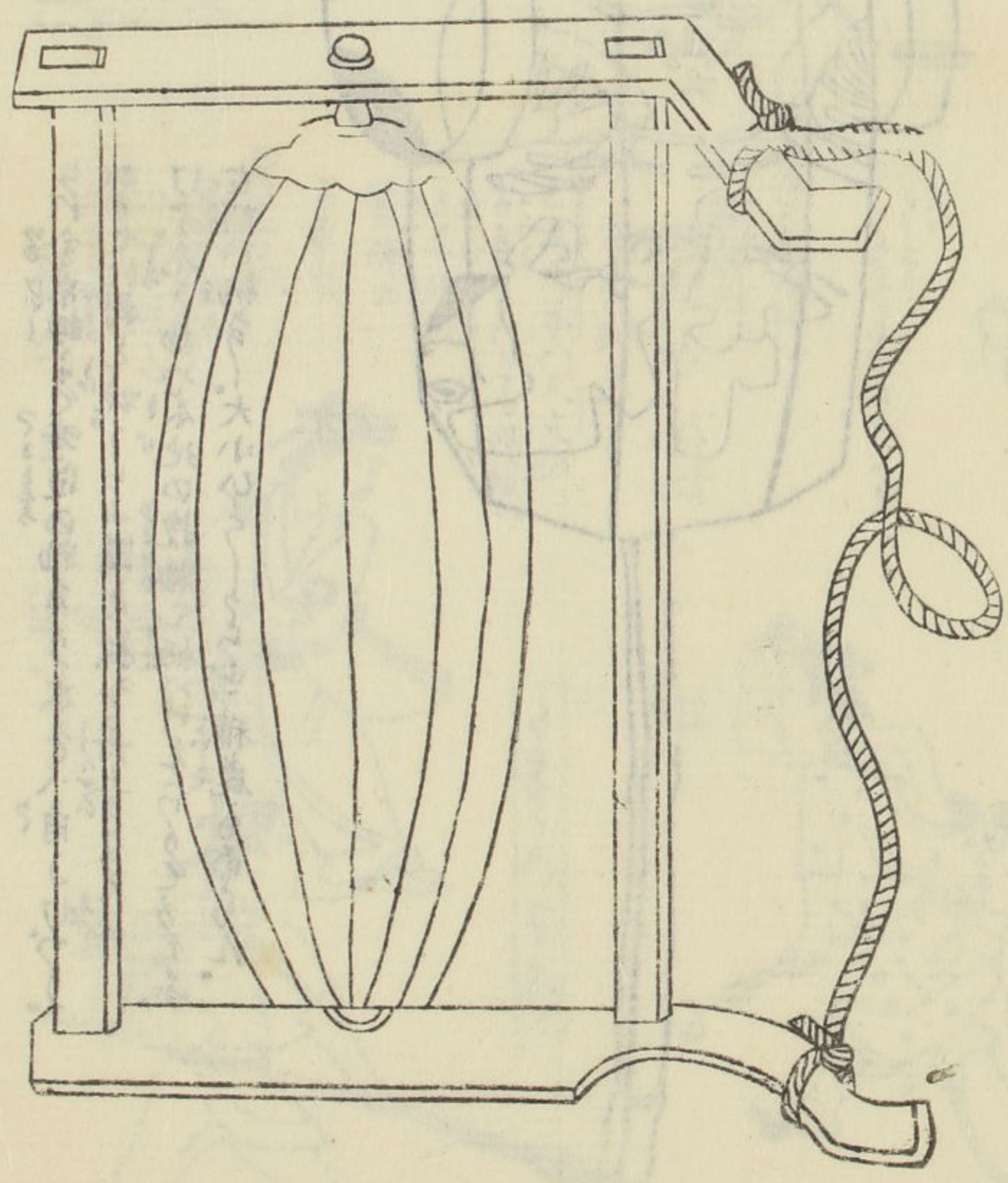
澤の板 小みんちんぐへん。のらんとおもひ。三春羽子板といふをうんふ。いづれも勢よ似たるべし。

○礮毒圖

明王坊か

二才會 礮毒の圖を

和漢三才會 礮毒の圖を 夷果と敵子の 毒も。礮毒田器 也。本朝田家 珠見とみる。





これ
玉を
玉を
玉を

明暦の此印行
一休ころ



明暦四年印行
京童

○ざりくをりくはぶ古備を
あつらんくくくくくくく
りてはをくくくくくく

貞享五年印行

日本歳時記



玉
くくく
くくくくくくくくく

万治三年印行

世説問答

此画を以て杖とざりくと別
あくを知るべし

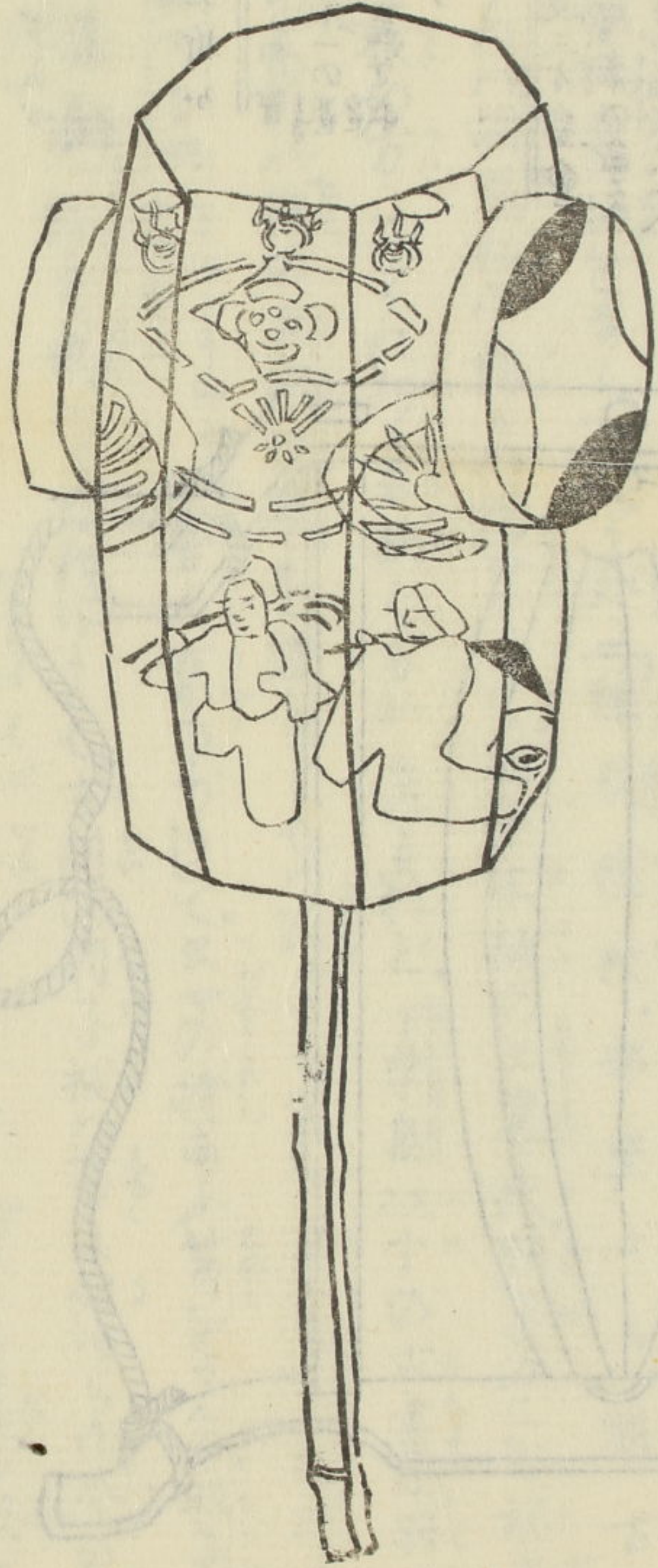
世説問答ハ天文の
古書あれども此後ハ
享和の時に
上木の時
當時の
さゆを
かきたる

りては万治
の此の證と
さるべし
たへんべん



あつらん

○おとりの高



られ今京師の好造の物あり本を八角のりぐり
ありてに尉と焼くらし鷹と松を丹青よく画
けを名きおの本地の挽物へ柄のけをいりくくく
右側の柄あり大小いりくくくくくくくくく
精鹿ゆあらん

みぎ
油尺よそくくくくくくくくくの長さ五寸余
柄の長さ四寸半

骨董上編 下之前七

九巴上者各取柳枝去皮彫成木口杖を木口と以皮復此説右の日記紀事
外纏于刀上用火烧黑去皮以分黑白之花此説右の日記紀事
名曰荷花蘭密再取箭棘之條挿供香火神前
次集各童手執木刀隊闌于途凡有昏久無子之婦
將木刀遍身打之口念荷花蘭密必使此婦當年有
孕生男云々と云えたりこれ明人此方の事を傳へてきたる旨あり○ついでいふらん婦
人養草貞享三年 著卷之一 粥杖の半をたるして云々今も北國の方より杖の本として
雷盆槌のごとくある丸本に鶴亀松竹宝づの繪を彩色幼男ども
いま産せぬ新婦を打祝ひあり書言字考 粥杖・北越人
謂之杖木年中風俗考 貞享四年印 正月十五日の所云々たのこの中
大の子と云義也陰相を作りて童のりてのをびとて女を祝して大の
そのと子を持たまへと云義也年中故事要言 享保三年 又云「美濃岡泳官の

骨董上編下之前十

村より正月十五日新杖を削て其削屑の縷の如くあるを杖の頭に残
て名を削掛といふ是より女を替て大の男十三人といひ然ども其義を知る
者あり是も男子を生とを求る祝とあらん杖の遺意あり ○さて下は
畚をせよ北越よて祝本とあらげしより傳へて今造る杖あるを勝軍
本又勝の木 或は胡桃本よて造り春初男兒あり方かよりつらを餅花ともよ
一ツ所掛垂小正月よりして男兒らしをたがきて新婦あるあり也
新婦の腰を打まひびをて子を孕まひらむと又祝とと彼地の方言
小正月十四十五十六日をさして小正月といふ不よりして祝捧とも削掛とも
いふとぞこれ全く古代の由杖の遺俗あり日次紀事 婦人養草よりい
とまりは是あり勝軍本と云い白膠本のことぞ

和訓栞 由杖名の条云々諸國とも新婦を造り正月よりたがきて
新今いとの新官ありともあり云々

古代のひいな遊びの平日の玩あつてゐる前より如く三月三日を期として
その比飲詳るるに塵漆盪囊鈔文安三 卷之一の五節供の事を云ふと
如くも三月の節供の処は雛の宇ええざれば文安の比ひいませう上巳の雛あり
あつて又拾芥抄上之巻に歳時部を云ひたれど上巳の雛ええとこども盪
世語問答民間の年中行事童稚のころを載めひたせど三月
三日の條は桃の酒よりぎの餅雞合などのことひいな遊びのひいなえとひいな
天文十二年に續かきつゝひいといふ與骨ええたれば上巳の雛は天文の比ひいませ
ありあるべし無言抄「雛人形の事也」とのありて季をささめど雜ひいな
天正七年より二とせのまりふこれを記すとあれど天正の比ひいませう三月三日は
まらざりし御傘よも雛を籠とて曙山の井寛文三 三月三日の條よまひいな
控を控ふる期もあらねど打まをせと雛あるべし云々但聊あひいひあひいひ比の條よ
まをて今日のひいもぬべし云々とあり是等を合せて考ふるに三月三日を期とせり

骨董上編下之節三

あまがつの
考へ別あり
下にあま
江波草
のこむ
せらよ
合せえ
るべし

とわやくぬるるるべし天正以後のひい飲○三月上旬の己の日水辺に被さる事和漢
ごもよ古一源氏物語 次磨の巻に源氏須廣へたけの時二月の朔日己の日
まて浦辺に出陰陽師をめぐ被せさせ給ひ舟よりく一人人形をのせて流させ
給ひいひええ加茂保憲女集よ「あつたぬさよあきあせむぐとあゆぐつゝその人
のあつたをさくらん」あつたもいれが上巳の被り天兒を水に流すりゆもありあるべし
後きよ三月上旬巳を雛控の期として是ホの遺意よて天兒母子ホの贖物に酒
食を供はりゆく凶事をよめよあつたかぬか身を祝ひが古の雛控ひの方
ようりてつひよ今の如くいふあるるるべし國朝佳節録三月三日 兒一女
制紙一人為読者贖物之義乃被具也云々とつり然則原潔
身の神事より起りたれば今のまゝ雛控といふを雛祭と稱るも縁あり
あつたひいさうりひい

○古人のひいな遊びはなれぬもの今もなれぬものひいな遊びはなれぬものひいな遊びはなれぬもの
夫よあつたひい男の外をささめ女の内をささめひいひいひい幼時より嫁して夫よはひいひい

家業のついでに... 唐國の饅人 十八

唐國の饅人 十八

文昌雜錄 卷三四 唐 歲時節物 云云 三月三日 則有饅人一云云

名物六帖 饅人をひまきなりと譯されたり 卯れば二月

三日の饅唐土より唐の時を云あり 文昌雜錄 宋の龐元英が撰まれ古書あり 靜庵云 饅

離繪櫃 十九

寛永より元禄ののひたの繪どもを参考す 當時の離繪は... 實素

多たた坐上は後物とて悉並のそよと壇をさうらうらとあり 雍列府志 享

三刻 倭俗以紙作小偶人夫婦之形一是謂離壹對其外

大人小兒之形各造之女子並置坐上云云とありこれらも

も知るべし 其角が五元集 一段のひる清水坂を一目みる といふ発句もあれば

たぬく段をまうけさるものなり 欽享保のうらと一段をまうけたる畵あり 下にのららと

か如く 〇さき當時ひるの繪櫃といふ物あり その畵をうららに飯櫃形の曲物とて

蓋の方より祝ひの絵あり 江戸芝林明の由糸は賣ちぎ櫃といふ物に似たる

一雪が浴脣 明曆 正業がひる露の絵びつを祝ひ三日式 嵐雪が其袋 緑

三年 〇山崎の櫃買てらゝ離あそび 續猿蓑 梶市が白く雀子や

姉よりひる離の櫃などもあり 雍列府志 卷七 正一月 兒一女 所用

毬杖 羽子 并板 上巳 所用 板櫃 云々ともんえんり 〇正徳三年

印行の物に商人より桃の節句をうけその絵びつ云々とある 二月の末より

ひるの絵櫃賣と云ふありきとあり 〇土左日記 下 十六日 〇あけ

りて 〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

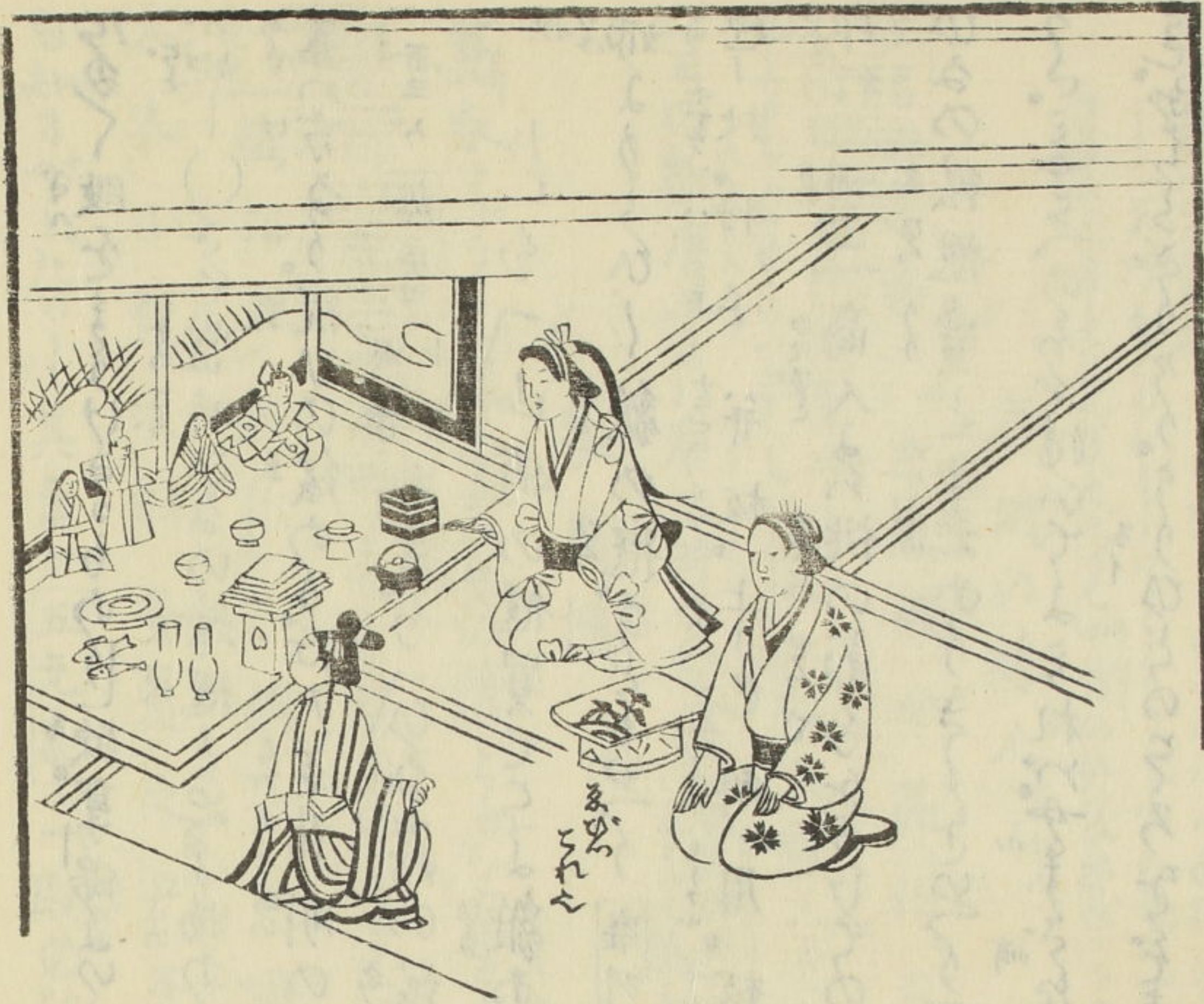
〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

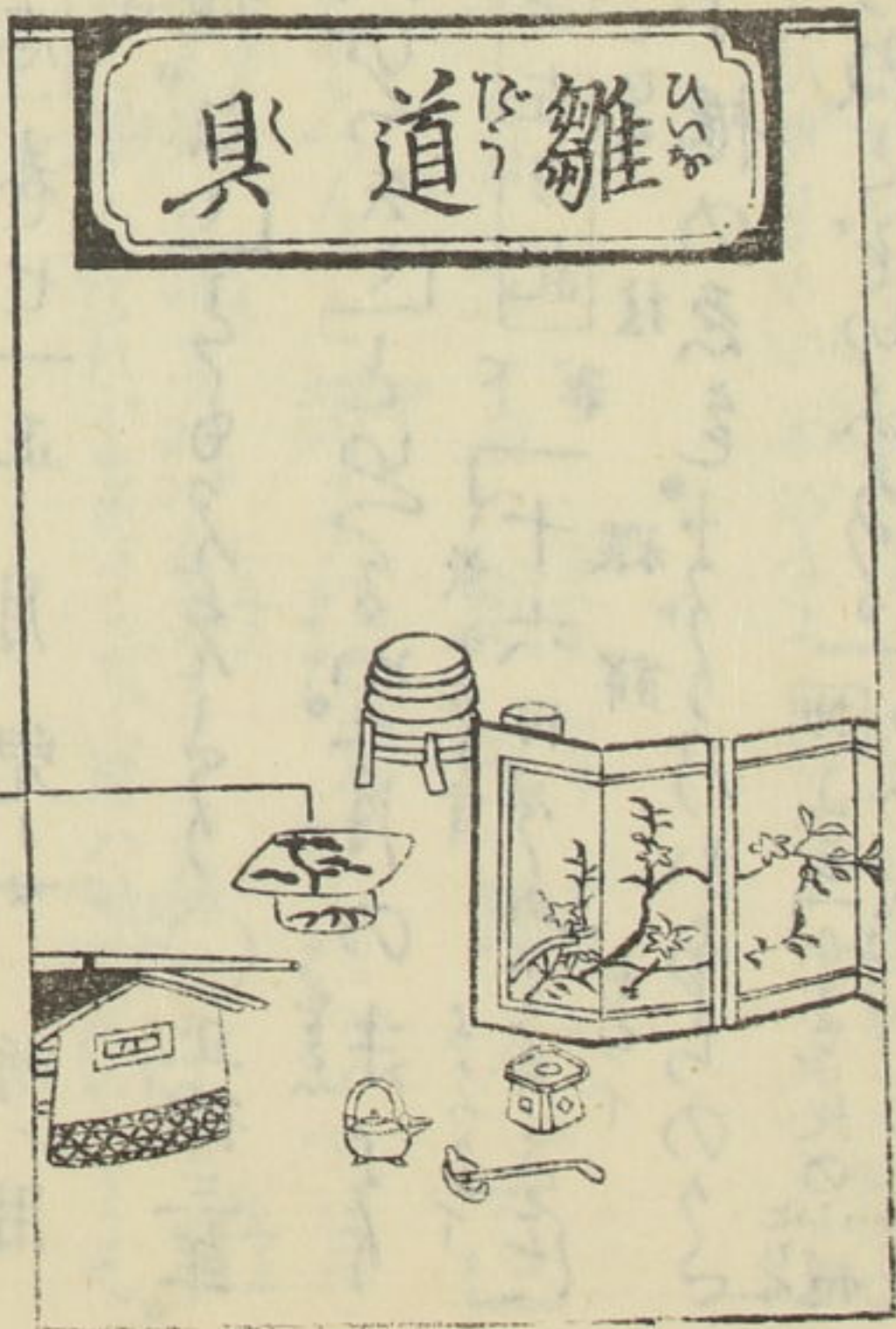
〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

〇あけのあけはひるよきれば 〇あけのあけはひるよきれば

○貞享五 日本歳時記に載る離遊の畜



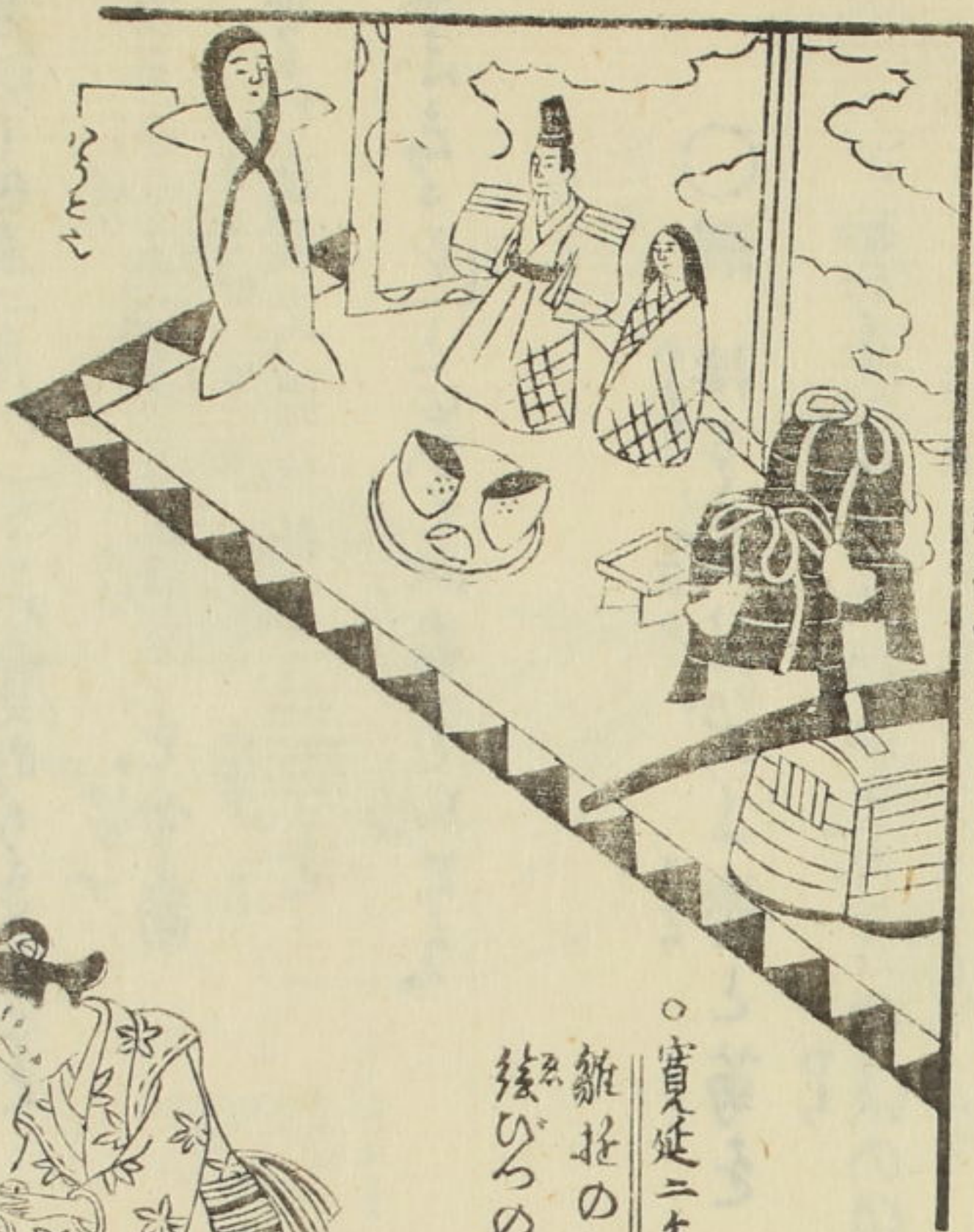
○元禄元年印本 女用訓蒙畜彙に載る後摺の畜



當時のひまはむいあくのどろろ
段をもちけだた座上一
支物してとああくのあつから
よもひの質素をさるへ

骨董上編 下之前三

○元禄十年印本 鳥居清信がゆける後のうちよび畜あり



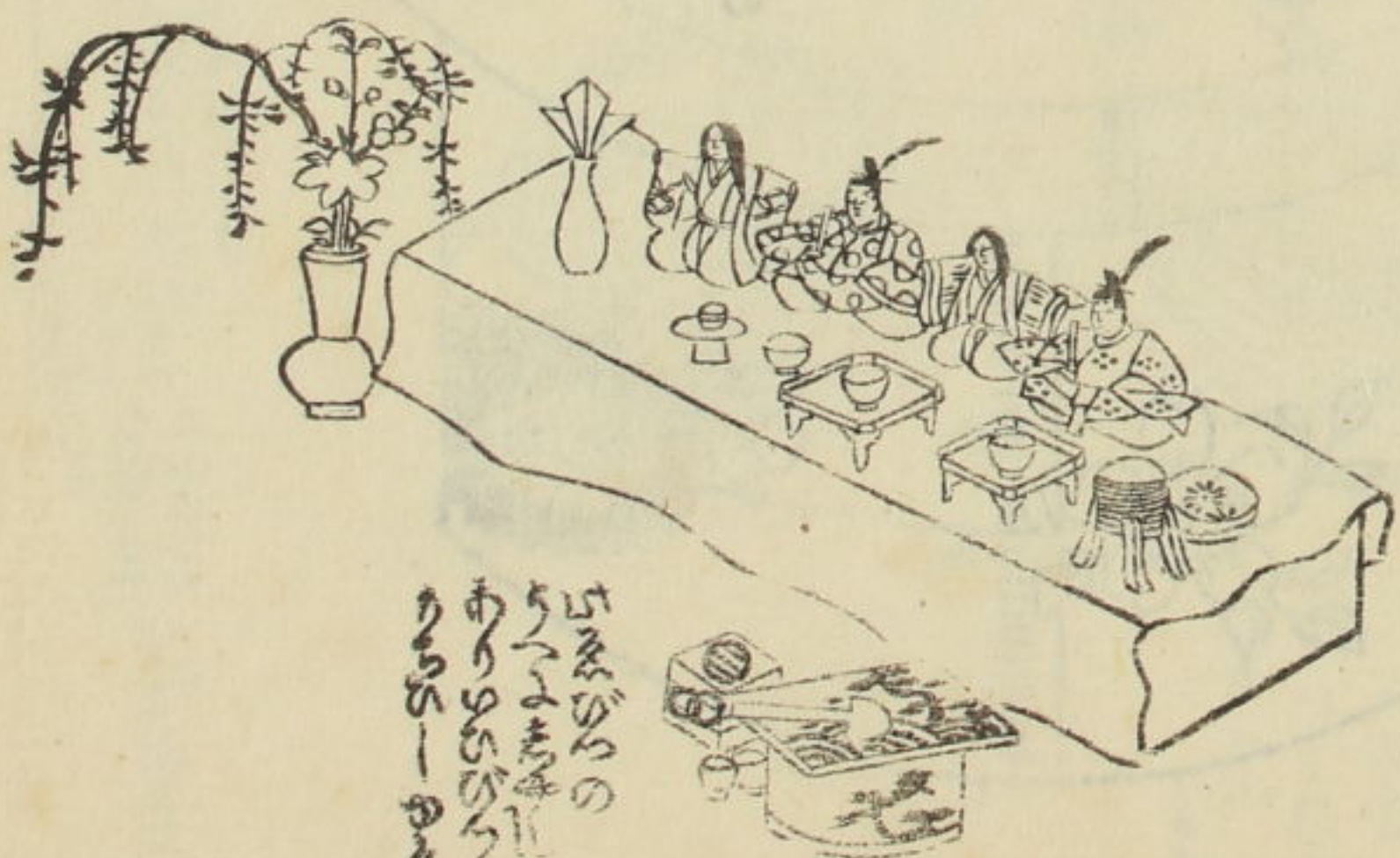
○寛延二年印本 籠持の記に載る後ひらの畜



この畜は
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の

○享保十七年印本

女中風俗玉鏡に
載る畜に當時の
かのごとくころろろ
一段をもちけだた



いあひの
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の

あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の
あつたを籠の

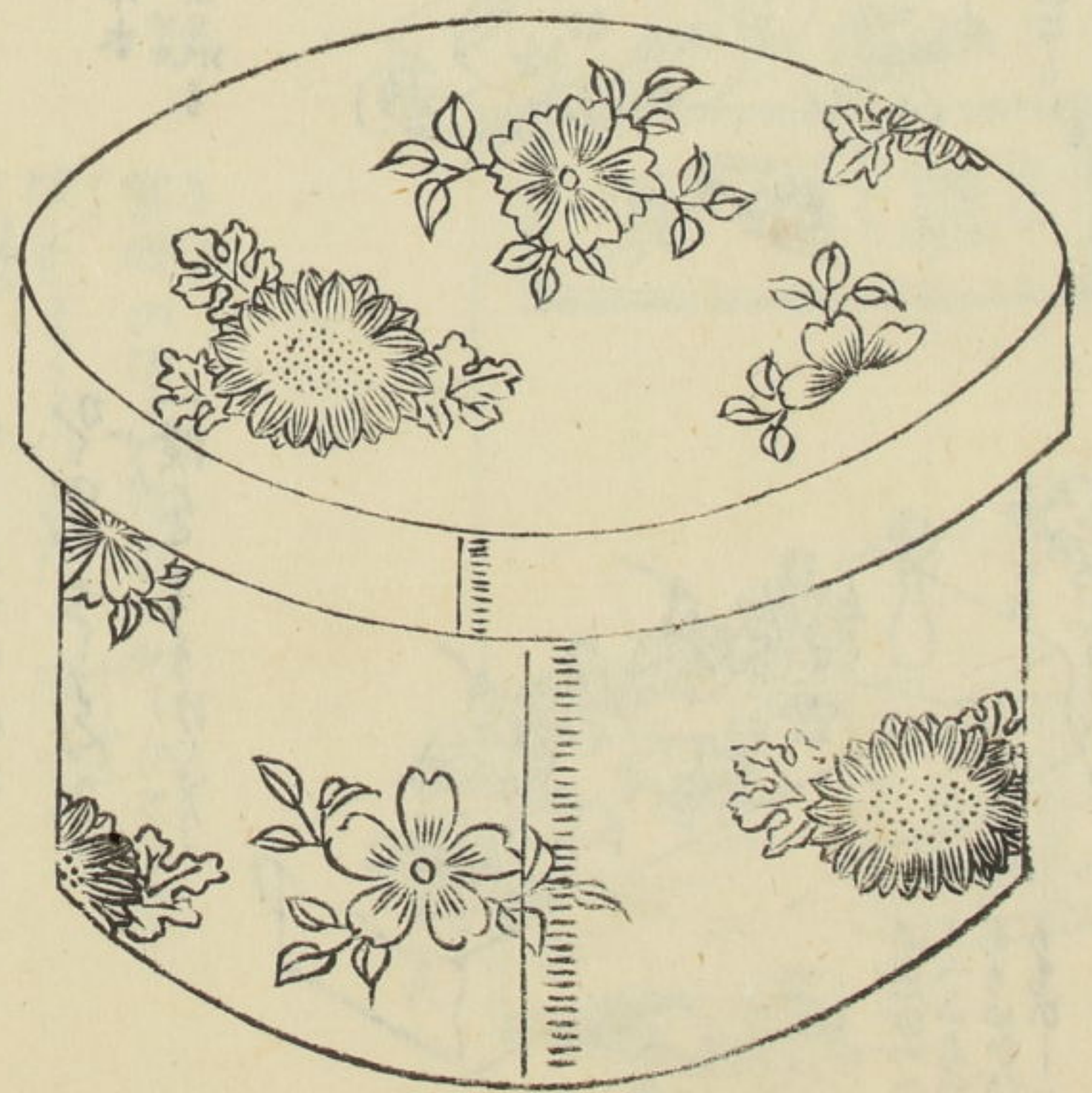
諸国奇遊談

寛政十一年刻 一 絃櫃のひをらるる也。

今も洛北の村里より三月の節句まで
 必用ふ予が幼時宝曆のまじり物も
 用ひゆる二月の末の賣わりきり
 うらふ今になえて見當らば今
 どの遠國又洛北の今の形を
 とふる也」といひて此画を出せり。

○醒 按る此絃びらうと櫻と菊を

三月のひると九月の後のひると
 うきたる絃あるべしられ近世の制るれはあつひ。



骨董上編 下之筋手画

享保の比の土雛音

三十一



男 高曲尺 五寸分

巾着の 巾着の 巾着の

緑青

丹 料の 左の

尚志堂所藏

とて土をゆくとほくと焼て胡粉丹緑青
 あどとせいろとりのあがりつち色あり
 かうと享保前後の物とる色
 際草かきよめやあつひ
 ひりの質素と
 えられたり。



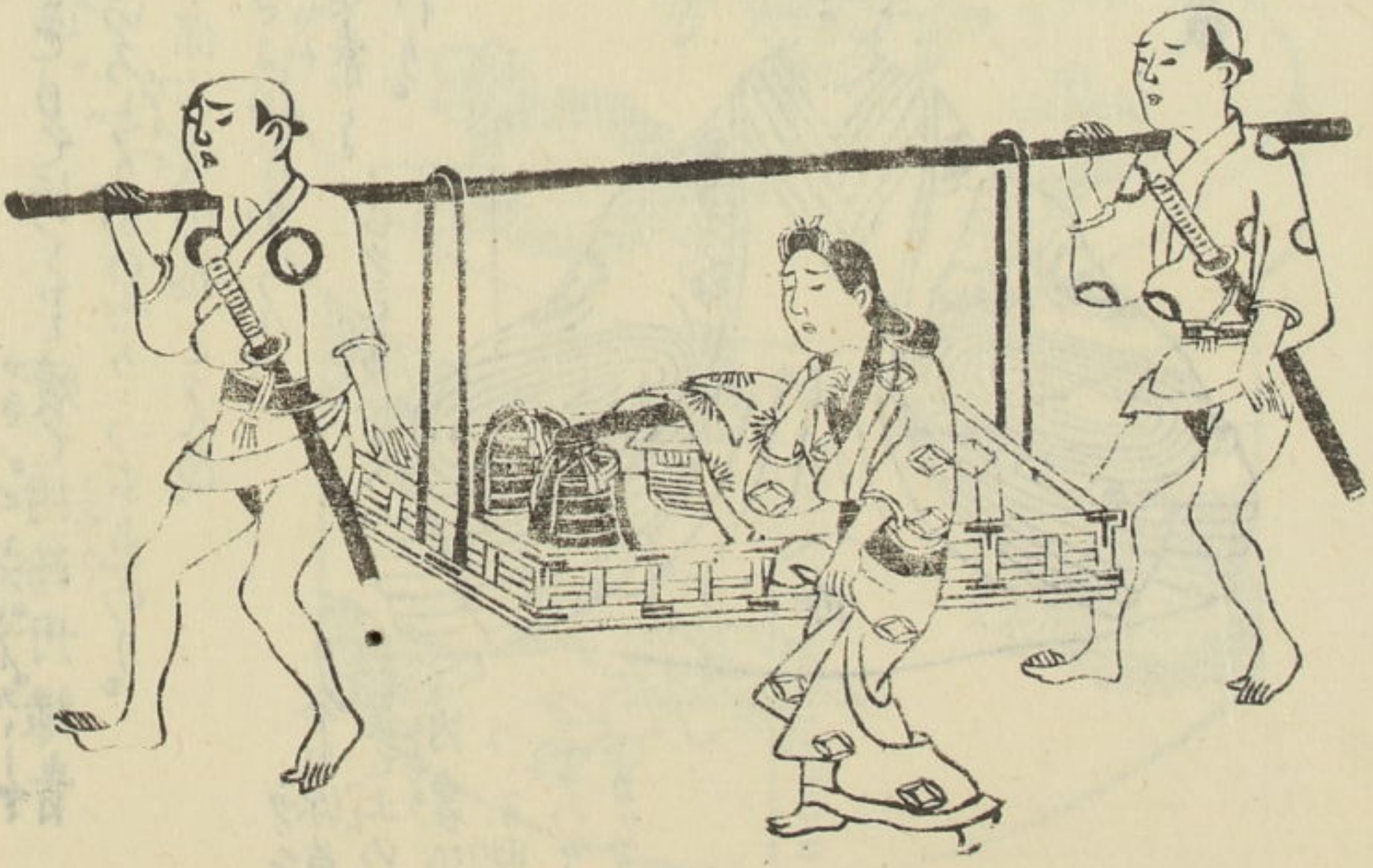
今も你草
 内裏ひるを
 つる田舎
 しのをれを
 けい

今も田舎の女子生れとて三月の節句は江戸の今戸焼の土ひるを
 祝ふといふに古俗の田舎のこれり。真列の田舎も土ひるを
 ららふとあり。

○ 雛使 畜 三十二

「物語」の雛使は、昔三月三日、黄の雛を、
 女は雛を、とてひるを、あがり、食事を、を、する、
 いろくの、器、諸道具を、あがり、草餅を、
 ひるの、不、い、入、醴、を、揚、入、小、蛤、ホ、を、
 沢、山、節、白、の、礼、と、て、ひ、る、を、茶、物、の、ゆ、せ、
 指、不、く、拍、せ、親、類、を、悉、く、つ、つ、の、と、是、
 成人の、時、敷、入、く、世、帯、持、の、袴、昔、古、ち、あり、
 當、分、の、あ、そ、び、に、あ、り、と、い、ふ、こ、ろ、と、此、畜、は、
 ち、の、あ、り、ひ、り、ひ、る、の、つ、つ、の、ひ、の、ひ、の、思、ひ、こ、
 中、の、品、う、り、あ、そ、び、あ、り、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、こ、
 ひ、り、の、雛、は、あ、ゆ、さ、げ、を、め、ら、ひ、たり、今、ゆ、あ、あ、
 ち、は、節、白、あ、ま、さ、げ、を、ほ、く、ま、こ、い、ち、あ、り、
 本朝食鑑 日十刻 白酒云々
 俗三月三日、為節物、供雛
 祭、と、い、は、れ、は、そ、の、あ、そ、び、も、白、酒、を、も、用、ひ、たり、
 元禄十六年印行
 俳諧日本国

○ 天和貞享の比、菱川、所、宣、が、あ、り、る、
 年中行事の、印、本、よ、此、畜、の、り、



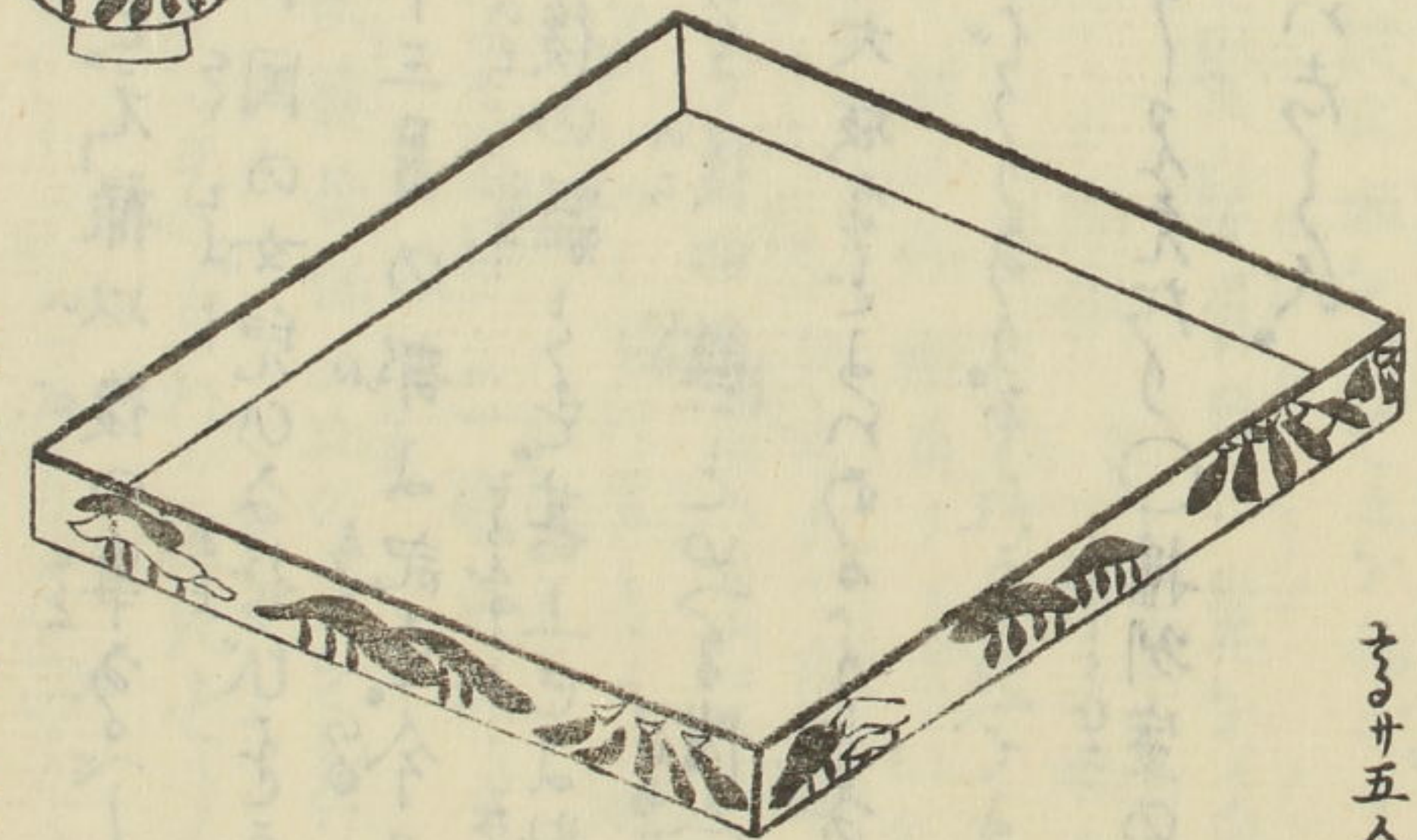
骨董上編 下之前三五

あゆ 魚、海、ま、ま、の、上、の、の、り、あ、さ、
 村、白、雛、の、つ、つ、の、酒、の、弱、足、布、各

○ 雛 椀 折敷 圖 三十三

椀、挽、物、の、木、地、あり、折敷、は、片、木、の、
 せ、と、の、の、き、り、の、よ、を、粗、糙、よ、ほ、く、ま、り、
 ら、れ、も、本、地、あり、丹、緑、青、よ、く、松、竹、の、
 弦、あり、京、所、の、明、和、安、永、の、比、
 ま、心、あ、り、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、こ、ろ、こ、
 か、み、く、古、た、物、と、を、あ、ら、ぬ、
 質、素、ま、そ、う、り、と、雅、致、あり

椀、三、寸、一、寸、
 一、分、余、
 折敷、三、寸、
 五、分、
 切、の、ぶ、と、を、
 こ、ろ、こ、ろ、



折敷 方三寸三分
 三寸五分

京都 青李庵 藏

○後の雛 三十三

後の雛の事古き物語いまもえあつらふに元禄以後の事あるべし 滑稽雑談

止徳三 卷十七よ云「後の雛 九月九日 和国の女兒ひるおびをあらとて古き

物語もゆかり上巳の節は授けらるる三月の節に記す。今又九月九日

賞する女兒多し云々。俳諧是を名付て後の雛とて其上巳に對して謂ふに

晋子十七回 享保八 年刻 物のあはれとてあき後の雛とて附合の句ありされば

正徳享保の比にさすもの事。今由京大坂あどまのあつらふにあれど二月の

如くさるものあつらふに雛を二ツ三ツ出してあつらふにあり。それもあつらふにあらざらん

吾山が朱ひらさきよびその塚もあつらふにえたり ○播別室の辺に八朔に

ひまを立る所ありと或人いふ。其実否にあつらふに

○姫氏の雛 三十四
姫氏の漢名を金鷲蛋といふ形鷲の卵に似たれあり。元禄のあはれ女兒

骨董上編 下之前二十六

それを雛よほつらふに平日にゆきおびたつらふにありき 雍州府志

田間より出。其大さ如梨。其色至て白。故に姫を以て之を梅。女兒斯氏を求め

少莖を留め。白粉を其面に傳。墨を以て鬢髮眉目。鼻を畫き。水引を以

て其莖を結び。揚擗て玩具とす 和漢三才圖會

を収て眼鼻口の狀を畫き。以て翫とす。故小俗姫氏と名す 百卷

王元集拾遺 千氏やわらわいとも思ふ 類

うらたののありにありたららごのわら 抄

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

文化十年より凡八百余年の前よりあり。それが進んせまもあつらふに

